

令和元年5月27日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02368

研究課題名(和文) 愛媛における学問の場の形成 中・近世文学受容の一樣相として

研究課題名(英文) A study on the academic environment of Ehime -with a focus on the acceptance of pre-modern literature and culture-

研究代表者

田中 尚子 (TANAKA, NAOKO)

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：50551016

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)： 愛媛(伊予)という地は近現代における漱石や子規の俳句といったところでの文学、文化は評価されるものの、それ以前の動向についてはあまり注目されずに来た。そういった伊予の文学、文芸の在り方に対し一石を投じるべく、中世から近世において伊予の地において展開された学問の有り様について、中央の文学、学問との関係性と照らし合わせつつ、明らかにしていった。

具体的には中近世期に愛媛で作成された作品の分析を、中央のテキストの享受といった観点から行った。それと同時に、研究代表者が従来取り組んできた、室町から近世における注釈・学問の研究も継続することで、研究の充実をはかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

伊予(愛媛)という土地は、現在では特に松山市に関しては、正岡子規や夏目漱石などのゆかりの地として知られ、「俳都」としての認知度も高まりつつあるものの、それ以前の動向についてはあまり注目されてはこなかったように思われる。しかし現在のそういった状況に至る、前近代における文学・文化活動、学問活動の実態を解明し、その変遷の過程の道筋を明らかにしていくことは、文学研究の領域においてはもちろん、地方創生などが謳われる昨今においては社会的な面からしても重要になることは間違いない。本研究課題はそういった愛媛のそれまで看過されがちであった部分に光をあてることとなり、今後の愛媛を考える一助となるものと考えている。

研究成果の概要(英文)： Although Ehime (Iyo) is highly regarded as its literature and culture such as Soseki's works and Shiki's haiku in the modern times, much attention has not been paid to the literature and culture in pre-modern times. In order to appeal the importance of literature and literary arts of Iyo in pre-modern times, I tried to make clear how the works and studies done in Iyo in pre-modern era(from Muromachi era to early Edo era) was improved, with a focus on the influences of literature or study which were done in the capital area.

Specifically, I analyzed some works created by the person who stayed at Ehime in the Middle and Early Modern period (such as "Wakiya-gisuke Engi", "Hanaga-dera Engi", "Seiryō-ki") from the viewpoint of the reflection of the texts which were made in capital area. At the same time, by continuing the research on "Shomono(annotations and studies)" in the middle and early modern period, I improved the study about the network of the scholars in those days.

研究分野：日本文学

キーワード：学問 注釈 愛媛 享受 地方と中央

## 1. 研究開始当初の背景

伊予(愛媛)は今現在、“俳都”としての認知度は高い。しかし、なぜそのような地位を獲得し得たのか、そこに至る過程に関しては、近世後期から近現代の枠組みで論じられることはあるとしても、それ以前の中世期や近世前期の観点からはほとんど取り上げられることがなかったように思われる。

とはいえ、地域の文化的土壌は一朝一夕に成り立つものではなく、長期的なスパンで見通すことが重要となるのは言うまでもない。事実、伊予の地には、近代以前の文献が相当数残されており、中世、近世期における資料群の中には、当該時期の文学、学問の享受の実態を示す貴重なものも多数含まれている。そして、それらのテキストは、伊予という土地・場の特性を読み取れるものであるのは当然のことながら、それと同時に中央と地方との関係性をも窺えるという特性も有している。すなわち、中央に対しての地方の独自性、特異性、地域の存在意義を強調する動きが見られるものが数多く存在するのである。とかく中央での動向を中心に研究されがちな中世期、近世期の文学・文化活動ではあるが、それだけでは当時の実態を把握しきれないことを訴えるべく、伊予の地を取り上げ、その地での文献を扱い、地方の文化活動の一端を示しつつ、その成果を中央の動向と相対化させていく試みが必要となるのである。

本研究はそういった事情が背景にあり、これまで看過されてきた諸文献に光を当てる、もしくは特定の領域でのみ扱われてきた資料に新たな価値を付与せんとする試みから生まれたものである。

## 2. 研究の目的

1. の「研究開始当初の背景」の項に記したこととも重なってくるが、近代に入ってから、漱石や俳句といった限定的な時代、局面での文学・文化に特化して語られがちな伊予(愛媛)の地ではあるが、そういった近現代における伊予の文化的な現象は突然発生したわけではなく、漱石や俳句文化が花開くための土壌が、それ以前に長い時間をかけて作られてきたであろうことは想像に難しくなく、その土壌作りの期間に当たるのが中世、近世期である。伊予における中世、近世における文化圏の実態解明を行うのが本研究の主たる目的である。

研究代表者の専門分野は軍記と学問・注釈であるため、そこを主軸に据え、伊予で成立したテキストの分析を扱い、その特質を明らかにすると同時に、その特質の相対化をはかるべく、中央での学問・注釈活動についても継続して行い、それと伊予の場合とを照らし合わせていくこととした。

尚、本研究課題に取り組むことによって、伊予の地において未整理・未検討だった資料に光をあてることが可能となり、その成果を公開することで、他の研究者たちにも関心を持ってもらえることに繋がり、それがひいては伊予地域の文学、学問研究の発展を実現することにもなると考えている。

## 3. 研究の方法

愛媛の文学、文芸に関連する資料の閲覧・収集を行い、その資料を丹念に読み込み、それらをその周縁の文献と比較しつつ、当該資料の特性を明らかにしていくのが、本研究の主たる作業となる。そういった事例を積み重ねていくことで、当地における中世期から近世期にかけての学問事情を解明していくことが可能となるのである。

そして、それと同時進行で、中央における学問・注釈活動の実態を把握していくべく、中央で成立・展開していく、中世から近世にかけての諸注釈書・抄物の分析にも取り組む。これは研究代表者がこれまでも行ってきた研究テーマであり、具体的には五山僧や清原家など、室町期の公家学者、さらには林家など江戸期の儒学者たちによる漢籍享受、漢籍利用の実態、学者間の交流関係、ネットワーク構築の様相について明らかにしてきた。その研究を継続していくこと自体も非常に重要な作業となるのだが、そこで明らかになったことを、先に記した、愛媛という地域で展開された学問事情の研究結果と重ね合わせていくことで、中央と地方の文化の差や、中央から地方へと文学・文化が伝播する過程が浮かび上がってくるのである。

つまり、従来の研究スタイルを継続しつつ、それと同じ方法で伊予の文献、学者を扱うことで、自身のこれまでの研究のさらなる拡大、発展を実現させるのである。

## 4. 研究成果

『脇屋義助卿縁起』、『齒長寺縁起』、『等妙寺縁起』といった、伊予(愛媛)で成立したテキストを取り上げ、そこに記される元弘の変、建武の政変といった歴史的事項について、同じくそれらを記述する『太平記』と比較することで、伊予のテキスト群が、独自の歴史理解を繰り広げ、伊予がこの時代の流れに大きく関与しているという文脈を形成していく様子を明らかにした。あわせてその際、漢籍の利用法にも特徴が見られることなどを指摘した。

また『清良記』という軍記は、今現在は日本最古の農書として評価されるが、そこに、中央とは異なる地方での軍記の系譜が成立していること、さらには学問的な関心が見られ注釈書とし

での性格も付与されていることなどを明らかにした。それも中央とは異なる伊予の新たな文学、学問活動の一端であったと位置付けられるのである。

こういった伊予のテキストの分析とは別に、研究代表者がこれまで長期的に取り組んできた日本における三国志享受の様相の通史的把握、さらには室町から江戸にかけての学者たちの学問環境ネットワーク構築の実態解明についても引き続き取り組んできた。その成果は本研究期間内に著書『室町の学問と地の継承 移行期における正統性への志向』としてまとめた通りである。この作業結果と、先に記した伊予のテキストの研究成果を重ね合わせ、そこからまた中央と地方の学問の在り方について考えることができたことと確信する。よって、今後も引き続き、こういった観点から研究を進めていく所存である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

田中尚子「『呉服文織時代三国志』に表れる都賀庭鐘の歴史認識 室町の学問の敬称として見た場合」(愛文第54号 頁数未定、2019年3月刊行予定) [査読有り]

田中尚子「『清良記』より窺える伊予の学問事情 “日本最古”の農書となった戦国軍記、その学問・注釈的性格」(古典遺産第68号 pp.62-73 2019年3月) [査読無し]

田中尚子「江嶋為信の学問の一齣としての『太平記』受容 『脇屋義助卿縁起』の成立」(国文学研究第184集 pp.1-14 2018年3月) [査読有り]

田中尚子「日本における『史記』の受容 室町期の学問の一樣相として」(愛媛大学「資料学」研究会 資料学の方法を探る16 pp.16-23 2017年3月) [査読無し]

田中尚子「『碧山日録』に見る太極の三史への取り組み 長祿・寛正期における学問の一樣相」(日本文学第65-7号 pp.24-33 2016年7月) [査読有り]

田中尚子「二十一史通読に見る林鷲峰の学問姿勢 『国史館日録』・『南塾乗』との関わりから」(近世文藝第104号 pp.43-56 2016年7月) [査読有り]

〔学会発表〕(計2件)

田中尚子「『呉服文織時代三国志』にみる都賀庭鐘の歴史認識 室町の学問の継承として見た場合」(平成30年度日本近世文学会秋季大会 2018年10月)

田中尚子「日本における『史記』の受容 室町期の学問の一樣相として」(愛媛大学資料学研究会 2016年11月)

〔図書〕(計1件)

田中尚子『室町の学問と知の継承 移行期における正統への志向』(単著)(勉誠出版 pp.384 2017年11月)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

報告書 2 件

田中尚子「等妙寺・齒長寺の本末関係と縁起 「等妙寺縁起」・「齒長寺縁起」における相互補完の可能性」(平成 28 年度愛媛大学法文学部人文学講座研究推進経費成果報告書「愛媛の文学芸術に関する文化誌研究 地域の言語文化資源の位相と展開」) pp.7-12 2017 年 3 月

田中尚子「『清良記』の成立より見る伊予の学問文化圏 “日本最古”の農書と評された戦国軍記」(平成 29 年度愛媛大学法文学部人文学講座研究推進経費事業成果報告書「愛媛の文学芸術に関する文化誌研究 地域資料からみた 混淆」) pp.9-14 2018 年 3 月

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号 (8 桁)：

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。